

勝利か然らずんば死か

学苑会中央執行委員会
委員長 永田 修

ありとあらゆる戒めと呪術にさいなまれ、ズルズルとひきずった体を解き放たんとする戦士の集いし広場——駿台祭。

怒怒怒と怒羅無の鳴り響く中、勇壮と進軍を続ける戦士の滋養の場——駿台祭

1971年度駿台祭。荒れ狂うサボタージュの嵐の中、貫行されんとしている。沖縄・三里塚に於ける戦いの中、展開されんとしている。

過去、駿台「祭」に関して、種々の見解と様々の位置付けがなされてきた。しかし、それらに欠けていたものは一体何であったのだろうか。「文化」という名の下に、あたかも「自由」であるかの如く振舞われてきた。とってつけたように「反」体制を語ってきた。

しかし、「文化」が明確な政治運動のダイナミズム性と結合しえない限り、「文化」そのものも現体制を「左」あるいは「超」から支えるものでしかないことは、歴史が明らかにしている。

中国における文化大革命を、対岸のものとししか把握できない諸君には、文化を語る資格すらない。文革を単に政治領域からのみ、あるいは、文化領域からのみ、把えることの浅薄さを繰り返してはならない。

中国共産主義革命の一環としての文革であることを考え、かつ文革が革命運動の大きなダイナミズムの中で行なわれたことを考え合わせてみてわかるだろう。

与えられた「自由」と獲得すべき自由とは雲泥の相違がある。我々の目指すのは、共産主義社会という相対的な無限的自由社会である。一般的な「自由」なぞは存在しない。革命か反革命かである。あたかも自由が無媒介的に無原則的に存在しているかのような錯覚は、それは全て虚偽であり、欺瞞であり、あまつさえ革命運動に対する敵対に値するものである。それはあく迄も「許容範囲」を突破できうるものではないからである。

それは、ブルジョアジーにとって、政治面から工作することをもはや不可能にすることを余儀なくさせ、軍事面での対応を公然と追求しなければならないほどに煮つま（マリゲラ）らさせることを過度的目的とするからである。

我々の闘争は、なにかの理想を守るためではなく、その理想を現実に変化するための闘いである。

我々は破壊しつくす。全てを。破壊は破戒に通ず。否、破戒なき破壊は無意味である。それは、ありとあらゆる領域での破壊を目指す故である。破壊の質とは、歴史の中で〈生き方〉を共有できうる質である。〈共同体〉は真にそこに存在する。すなわち、破壊にアンガジュする中で、〈共同体〉が創出されるのである。

今年になって、様々のゲリラ活動が展開されている。しかし、ゲリラを〈核〉にしてはならないのである。明確な革命戦略の一環としての位置付けをなさなければならないのである。しかし、行動、行動こそ前衛建設への唯一の道である。

我々は、飽くなき前進を遂げるであろうことを、ここに宣言する。例え、その過程で地に伏さなければならないことが起こったとしても、我々が人民の海にいる限り、絶対に確信できる。革命が行なわれることを。

また、我々の前にも幾多の先駆者達がいる。ゲバラ、マリゲラ、ボー・グエン・ザップ、マルコムX、その他多勢の無名戦士たち。

我々の前には道がある。そして、我々の後にも広大な道が。

我々は勝利する、必らず。然らずんば死か。

最後に、駿台祭実行委員会の人々の努力に最大の謝辞を述べると共に、てんでカッコよく死なれんことを希望する。

世界革命戦争勝利万歳！

我等の手に無限の時、空を！